

Title	平沢豊著 漁業生産の発展構造
Sub Title	
Author	高山, 隆三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.11 (1961. 11) ,p.1034(102)- 1035(103)
JaLC DOI	10.14991/001.19611101-0103
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611101-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平沢 豊著

『漁業生産の発展構造』

スコラ的な現実逃避から容易に脱することが出来ない。このような時に、わが国哲学界の長老で、しかも安保闘争などにおいて衰えぬ行動意欲を示された著者が、大胆に現代の人間の条件を直視して、貧困、戦争、ファシズム、人間疎外、平和、植民地問題、原水爆問題などを通じて現代のヒューマニズムの具体的なあり方を提示されていることは、非常に貴重である。

氏の哲学は、「第三ヒューマニズムと平和論」「現代倫理思想の研究」「哲学概論」「人間と倫理」などですでに組織的に展開されており、新書判に収められた本書は、Iヒューマニズムとはなにか、II現代のヒューマニズム、III人間疎外とヒューマニズム、IV全体的人間とヒューマニズム、V人類ヒューマニズム、という構成を通じての、著者が「戦後たどってきたヒューマニズム思想遍歴のスケッチ」でもある。しかも単なる繰り返しではなく、たとえばパッペンハイムの疎外論に学んだり、安保闘争の体験が織り込まれたりして、新鮮の感を失わない。その主要な論旨は個人主義ブルジョワ・ヒューマニズムは貧困や戦争などの今日の問題を解決出来ないの

象物となっており、人類共同体をその存在の基礎としており、その最高の目的―幸福実現のためには、人類の主体として全体的人間が確立されねばならぬ、平和は相対化され、人類ヒューマニズムは特定の社会的条件へ向って対決をいどむために、思想と行動のヒューマニズムにまで上昇しなければならぬ、というような点であって、人類の幸福を目指す哲学者の誠実な学究の姿が、簡明な行文の中にしるされる。

その内容については、マルクス主義と実存哲学、あるいはルフェーブルやパッペンハイムがいろいろ活用されているので、いく分折衷的の感を免れ得ない。それぞれの立場の人から見ればかなり異論もある筈だし、違った専門分野、たとえば経済学の眼からすれば喰い足りない点もあろう。だが、思想を失ってあまりにも形式化した現代の経済学は行動の指針をこの書から学び得るし、さらにさまざまな科学が協力して現代のヒューマニズムを一層深く掘り下げることが望ましい。(岩波新書・一九〇頁・一〇〇円)

白井 厚一

で、人類ヒューマニズムの立場に立たねばならない、人類は現実はこの地上に存在する対

第二次大戦によって壊滅的な打撃を被った漁業生産は、戦後の食糧危機に対する食糧増産政策の一翼をにない、復讐融資等を通じて、戦後初期に回復をとり、さらに発展を続け、漁船の大規模化は著しく進み、漁場は遠く大西洋に及ぶようになった。しかし、自然的に再生産される資源を労働対象とする漁業においては、漁業生産力発展の形態・性格は、資本制生産のもとにおいては、「労働生産性停滞傾向」によって特徴づけられる。本書は、「労働生産性停滞傾向」を「漁業資源の性格及びそれに基礎をおく漁業技術との関係」で、また「停滞化傾向」を実現する「社会経済的要因」との関連で説明し、「漁業の現実の複雑な動きを再構成」しようとしたものであり、漁業経済の研究において、充分に開拓されておらず、かつ、現在、問題とされつつある分野の研究として注目されるものといえよう。

漁業生産過程の独自の性格とかかる生産をとらえた資本の具体的運動法則を、本書は先ず、漁業資源・技術・漁業労働の三者の合体である漁撈過程の豊富な資料を以て分析する。

新技術の導入、漁業労働生産性の上昇、相対的剰余価値の造出の過程は、同時に、漁業において、著しい労働時間の延長、労働強化による絶対的剰余価値造出行程であり、また漁業労働組織の変化―家長的船頭制度の崩壊過程である。著書はかかる過程を通じて

日本生産性本部生産性研究所編

『国民のくらしと第三次産業』

第三次産業

発展した戦後の日本漁業が、しかしながら「同一漁業資源に対して加えられる漁獲努力はますます大きくなり、単位漁獲努力当りにみた場合の漁獲量は遞減する傾向にある」ことから、さらに労働強化の増大がはかられ漁業労働災害、遭難の増加、また違反操業・漁場紛争が激化する等の矛盾が鋭く現われることを説明する。

たしかに、著者は、漁業生産過程の独自の性格を基礎として、日本漁業の構造、漁業資本、漁業小生産者の運動を把握しようとしたのであるが、しかし、その試みは、本書ではなお不十分な点があり、特に、日本資本主義の一生産部門である漁業の位置づけの視点および資本の運動が漁業生産過程の独自の性格の中でいかにゆめかかれてゆくかの分析が、「漁業経営階層の動向」「沿岸漁業の構造変化」の中で欠けている点等が指摘されるであろう。(未來社・A5・三七〇頁・八五〇円)

高山隆三

新刊紹介

日本は本年よりレジアー時代に入ったといつてよい。戦後十年の回復期をへて、その間朝鮮動乱による変則的なブームによる救いがあつたが、その後の沈滞期を脱して三十年より本格的な成長期をむかえた。その時の中核をなしたのは造船景気であつた。既にその前の景気を中心であつた繊維、食品は一段落となつていた。しかし造船景気はまもなく下火になつた。このとき日本は世界一の造船国になつていたが、世界一になつたことは発展の限界を示すものであつた。そして次に電機、自動車を中心になり現在もつづいている。昭和三年の不況に際しても弱電機の売上はいささかもおとろえなかつたのである。自家用車ブームは昭和三四年の岩戸景気から起つた。神武・岩戸の両好景気を通じて電機、自動車の成長は頂点に達し、現在なお成長がつづいているが、既に過去ほどの高成長は疑問であり競争も激化してきた。電機、自動車のあとをおって工作機械、土木建築、化工食品がつづいている。これらは神武景気にはあらわ

佐藤 保一